

## 津波を表す方言「ヨタ・ヨダ」についての一考察

齋藤平

### 1. ヨタ・ヨダということば

大正三年三月度会郡教育会発行の『地方方言集』<sup>1)</sup>に

よた(名) 潮水の急に満ちたり干たりする流れをいう  
の一項目がある。

ところが、現在、このことばについて三重県度会郡二見町・南勢町・南島町・紀勢町の沿岸部で調査したところではそれを見いだすことが出来ていない。度会郡ではもはや消滅したかと思われるがかつてはかなり広い地域で用いられたことばであった可能性があるため、現在の時点で判明したことばの語誌を記述しておきたいと思う。

さて、この方言集についてはかつて標準語引きにして発表したことがあるが、波浪に関することばはこの一例であった。

本集には当時神宮皇學館教授であった安藤正次氏が調査した旨末尾に記載があるが、実際には度会郡教育会が蒐集したものである。氏も指摘するとおりいつたい度会郡のどの地域でどのようにして集められたかがまったく不明である点にうらみがある。しかしながら、度会郡のどこかで記録されたことに疑いなく、それが年月を経てみれば唯一の手がかりになることもある。

## 2. ヨタの辞書的記述

まず、ヨタについてその辞書的記述を整理しておきたい。

いま、『日本方言大辞典』<sup>2)</sup>によって「よた」を検索するとつぎのようになっている。

- ① 潮流の急に満ちたり干たりする流れ。三重県度会郡
- ② 津波。岩手県宮古市「むかす、そのし、よだんきたことがあつてす」
- ③ 高波。三重県度会郡「よたがくる」
- ④ 風や潮流のために水面に生ずるうねり。静岡県榛原郡
- ⑤ 岸近くに浮かぶ泡の集まり。東京都大島「よたが出たから近い中に波になる」
- ⑥ 松の落ち葉。島根県八束郡
- ⑦ ↓よろ(足のもの)

①は冒頭に掲げた方言集を出典とする用例であるが、この①から⑤まではいずれも波浪に関係する意義。とりわけ、①から④までは高波・津波・潮流を示し、意義の核が共通であることを示している。③の意義についても同じ度会郡内で記録されているがこちらは「三重県方言資料(鈴鹿郡誠化高小ほか) Ⅱ稿(発行年不詳)」を出典にしているが原資料は未見である。

近年、三重県の方言民俗語を集成・一覧にした江畑哲夫氏の『三重県方言民俗語集覧』<sup>3)</sup>(全六巻)が刊行された。全一八〇〇頁、項目数五八〇〇におよぶ大著であるが、これに「五一〇一六 ヨタ」の項で記録されている出典を閲するとヨタが「地方方言集」と「三重県方言資料」を原拠としていることが知られる。

また、『日本国語大辞典(第二版)』<sup>4)</sup>では「よた」の項目に「津波のこと。」と意義記述し、用例として「風俗画報一 二〇号(1996) 海嘯被害見聞録『オレのワラシ(男の子の事なり)に何恨(なにうらみ)あるヨタ(海嘯の事なり)を起こした海が恨めしい』」をあげている。方言の項目は前掲『日本方言大辞典』①から⑤に同じであるが掲載順は②津波③高波①潮流④うねり⑤潮の泡になっている。

このほか、『総合日本民俗語彙』<sup>5)</sup>(第四巻)には、

ヨタ 團 大阪府泉南郡西鳥取村波有手あたりでいう。夏の終り近く、ダイナン(外洋方面)からのオイを受けて(あおりを受けて)波が大きくなることをいう。ヨタは晴れて風のない日でもやつて来て、船を砕くことが往々にしてある。これが来たときは日和が下からエグれることが多い(近畿民俗旧一ノ三)。

とあって、外洋からの大きなうねりがそのまま沿岸に到達し、船に損害を与えるほどの威力を持ったものとして記録されている。これは『日本方言大辞典』にある東京都大島の「⑤岸近くに浮かぶ泡の集まり。」の用例「よたが出たから近い中に波になる」ということも関連する。つまり、泉南郡西鳥取村(現在の阪南市)では外洋からの波浪を直接ヨタと表現したのであり、大島の場合はそうした波浪の前兆としての潮の泡をヨタというわけである。

以上から見て、ヨタは「外洋からの大きなうねり」を意義していると考えて良く、大阪府から岩手県にかけて分布していたといえる。

### 3. 三陸地方におけるヨダ

先の辞書の記述から「外洋からの大きなうねり」を中心的意義とするほか、とりわけ注目される点に岩手県宮古市での例がある。『日本国語大辞典（第二版）』が記述するようにヨダが津波の意義を第一義とするならば宮古市での用法が中心的用法になるからである。

このことについては、すでに吉村昭氏による報告がある。『三陸海岸大津波』の中で、「私は、三陸海岸特有の『津波』に代る地方語があるにちがいないと思った。それが、『よだ』という言葉であった」とし、作家特有のことばについての嗅覚の鋭さで、ヨダに焦点を当てて言及している。ここではヨダと津波の差異についての考察があり、まず、田老町役場発行の『津波と防災』から二宮三郎氏の聞き取り調査を引用している。

昭和三十五年五月、チリ地震津波があつた翌日、私は宮古湾の奥で津波の実施踏査を行なつた。

その時或る老漁師に津波の来襲した状況を質問すると、

「津波じゃねえ、あれはよだのでつけえやつだ」

と答えたので、

「よだ」と津波は違うものですか」

と聞くと、

「よだ、つてのは、地震もなく、海面がふくれ上つて、のっこ、のっこ、のっこと海水がやって来てよ、引き潮の時がおっかねえもんだ」

と答えた。

（傍点原文のママ）

そのうえで、吉村氏自身の聞き取り調査では、田野畑村の早野幸太郎氏との応答を述べ、

私がよだについて質問すると、氏はためらうこともなく、

「よだは、津波と同じ言葉だ」

と答えた。

「しかし、よだというのは地震を体に感知しないのに起る津波のことだという人がいますが……」

「いや、そんなことは決してない。明治二十九年前までは、三陸の土地の者は津波をよだと言っていた。津波という言葉が使われるようになったのは、明治二十九年の大津波の時からだ。よだは津波と同じ言葉だ」

氏は、眼に明るい微笑をうかべてきっぱりと言った。

（傍点原文のママ）

吉村氏は、その後の調査の結果、後者、つまり、ヨダと津波は同じ言葉であつて、「三陸地方ではよだという方言でよばれていたにちがいないと解釈する方が自然に思える」と結論づけている。

しかしながら、ヨダとツナミを別語とする考え方は根強く、九里十太郎（ペンネーム拓洋）氏は『明治二十九年・昭和八年 田野畑の大津波 伝承と証言』においてその差異を詳しく述べている。

津波を表す方言「ヨタ・ヨダ」についての一考察（齋藤）

津波を表す方言「ヨタ・ヨダ」についての一考察（齋藤）

海水が陸上に侵入してくる異常現象に、「津波」と呼ばれるものと、「ヨダ」と呼ばれるものと二種類有ります。各地では同一に「津波」と呼んだり「あくそ」（悪潮）と呼んだりしている様ですが、当地にはハッキリとした区別がありません。

震源地が近くて地震を伴い、波動が強く浅瀬に来れば海水が盛り上がり凄まじい速度で押し上げてくるのが津波であつて、字も明治二十九年迄は海嘯（つなみ）以後は津波と書くようです。

例Ⅱ明治二十九年三陸大海嘯・昭和八年津波などで、外海に面した地域に大被害を与えるが、内湾型の地形には被害が少ない。

一方の「ヨダ」は震源地が遠く地震は無いが波動が伝わってきて、海の水位が高まり、膨れ上がった海水が比較的緩やかに、陸上へ侵入してくるのです。当地で「ヨダ」はノッコノッコと来る、と言うのは当を得た表現だと思いません。

例Ⅲ昭和三十五年チリ沖地震津波・昭和四十三年十勝沖地震津波などで、津波とは逆に外海に面した地域には被害が少ないが、内湾型地形には被害が大きい。

また台風などが近い沖合を通過する際に起こる高潮も「ヨダ」の類ですが、これは「あくそ」（悪潮）とも呼ばれ「ヨダ」が極端な潮の満ち引きを示すのに、「あくそ」は潮の引きがなく通常の水位から海面が高まるという差があります。

更に津波の場合は、来襲する直前に大砲の発射音、或いは雷鳴に似た音が聞こえたという報告が長い岬の前面ほど多いのは、強い波動が先に岬へ当たった衝撃音と考えられ、「ヨダ」の場合はこの衝撃音が無いのも特徴とされています。

ここでは、基本的に①地震の伴うものをツナミ、伴わないものをヨダと使い分けていることの説明があり、そのほかの観点として②ツナミは湾口で被害が大きく湾奥では被害が小さいのに対し、ヨダは湾口では被害が小さく湾奥で被害が大きいこと③ヨダが極端な引き潮を伴うことを挙げています。これは、実際の経験によるところが大きいと考えられる。実際にチリ地震津波の被害で比較してみると、宮古市の約六〇キロメートル南に位置する大船渡湾では、昭和八年三陸地震津波の波高が湾口で七・八メートル、湾奥で三・一メートルであつたのに対し、昭和三十五年チリ地震津波では湾口で一・九メートル、湾奥で五・七メートルに達し、湾奥の市街地から西岸一帯の漁村が広く浸水したほか、河川を遡った流れによつて破壊された家屋も多く、死者・行方不明者が五三人に上っている。こうした、経験に基づいた津波の分類意識が九里氏の根底にあるといつて良からう。

このような津波に対する意識は三陸海岸各地に建てられた災害記念碑にも見ることが出来る。一例として大槌町安渡橋付近にあるチリ地震津波の記念碑を載せる。

昭和三十五年五月二十四日

津波災害記念碑

地震があつたら津波の用心せよ

地震がなくとも異常引き潮は津波と思え

津波があつたら高い所へ逃げよ

（碑陰）

昭和三十五年五月二十四日午前四時五十分来襲した津波は南米チリで起きた地震によるものであつて、突如四米の波高で数回に亘つて押し寄せ家屋の倒壊、流失、半壊二百六十七戸、浸水九百八十四戸を数えるほか、道路、堤防、橋津波を表す方言「ヨタ・ヨダ」についての一考察（齋藤）

津波を表す方言「ヨタ・ヨダ」についての一考察（齋藤）

梁、漁業施設、浅海養殖、漁船、商工業資材農地等に甚大な被害を与え、被害総額九億九千四百萬円に達した。異常引き潮によって避難されたので人的被害はなかつた。

なお、この碑は河北新報社及び東北放送局より寄贈金の一部を充て建立したものである。

昭和三十五年十二月二十四日

大槌町長 金崎節郎 誌

つまり、地震を伴う津波と伴わない（異常引き潮による）津波との両方に注意するよう呼びかけたものであり一般に被害者の氏名を刻んだ同種の記念碑とは様相を異にしている。むしろ「異常引き潮によって避難されたので人的被害はなかつた」ためにその必要はなかつたのであるが、いずれにせよ、三陸地方の人々にとって津波は生活にとって生命・財産に深刻な影響を与える最大の脅威であり、また、その頻度が他の地域と比して極端に大きいことから日常の防災対策を余儀なくされている。そして、その対策が生活と密接していることから、ツナミとヨダについて先にみたような意義の弁別が図られたと考えられる。

このほかにも、津波の体験談集『チリ地震津浪の思い出 チリ地震津波より三十年あの惨状を振り返って』<sup>19)</sup>でも、いくつかの体験談が記録されている。

及川秋雄氏「なま暖い風がドヨドヨ吹いているこんな時には津波が来るもんだ（母親）」

佐々木保衛氏「悪潮ダアガ、ヨダ、ダアもんだーが、大水で家の中は水浸しダアデバー（浜手の人）」

岩間栄一氏「大昔の津波は大槌の鯨山まで上ったそうで今でも鯨の骨が出るそうだ」

これらを見ると、全ての人がヨダというわけでもなくツナミを用いている場合もあることが知られる。

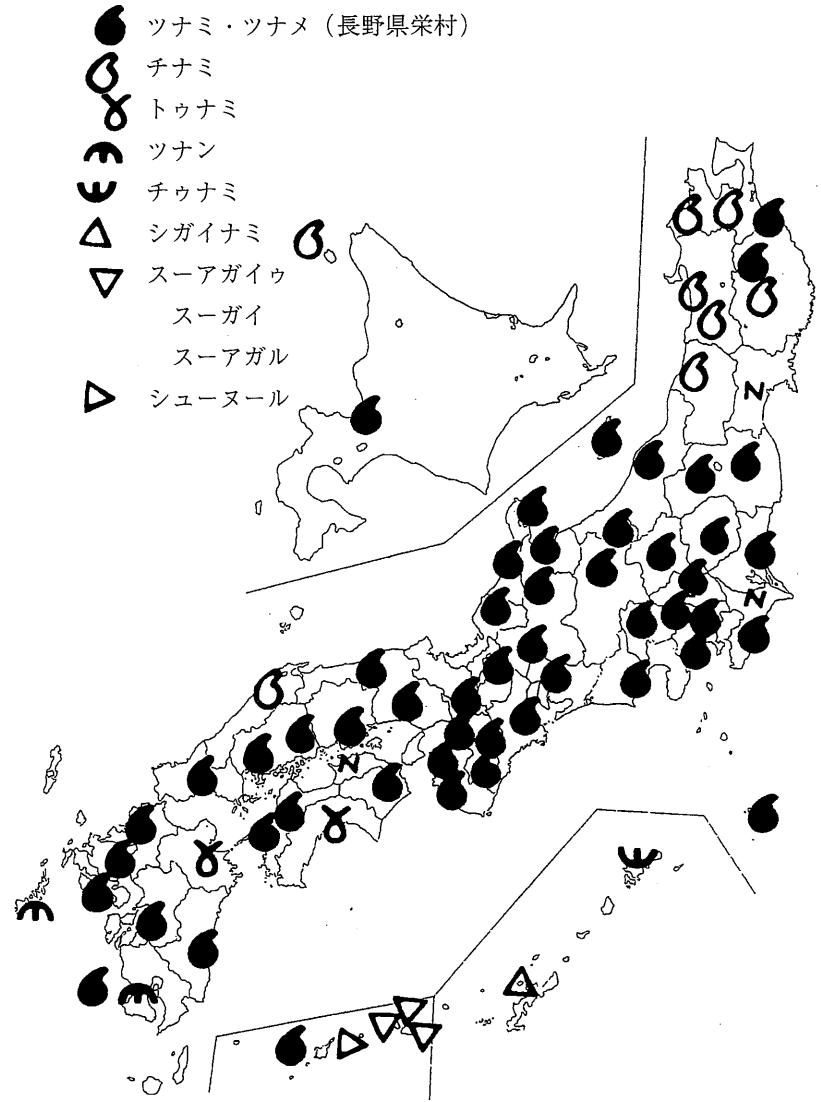
#### 4. ツナミの全国分布

つぎに津波をあらわす語の全国分布を確認しておきたい。

図は、『現代日本語方言大辞典』<sup>10)</sup>に基づいて作成した津波を表す語の全国分布である。これをみると、本州ではほぼツナミあるいは母音交替形であるチナミの語形になっており、各地域特有の語形をもっていない。各都道府県とも県庁所在地を中心に調査されているので沿岸部にその都市があるとは限らず、また、海岸線を持たない県もあるが、現在の共通理解を示すひとつの結果としてとらえられよう。言い換えれば、全国的にツナミという語形が少なくとも「津波」の理解語として普及しているということになる。

このことは、本辞典に記された注記の中に「この土地にはない」とか「理解語」とかが散見され、実態としての津波の体験はもちろん伝承にもそれがない場合でもことばだけが知られているようすからも窺える。なかでも富山県五箇山にある「新しいことば」という注記はそれが近年になって——おそらくマスコミによって——もたらされたことばであるというように如実に物語っていると見えよう。

[図]  
津波 (a tsunami ; a tidal wave)



5. ヨタ・ヨダとツナミ

以上、述べてきたことをまとめたいと思う。ヨタはもともと「外洋からの大きなうねり」を意義とし、場合によっては高潮や津波のことを示した。使用されていた地域は少なくとも大阪府から岩手県に至る太平洋沿岸部に広がっていた。しかしながら、そこに地震に伴う波浪だけに限定した意義をもつツナミという新語形が侵入した。このため、ヨタを潮流を含めた津波の意義で使っていた地域、殊に三重県度会郡の沿岸部では旧語形ヨタと新語形ツナミとが交替する結果となり、ヨタはほぼ消滅したと考えられる。一方、一世代の中で複数回の津波の被害を受けた岩手県三陸沿岸部では、元来ヨタを用いていた。そこに新語形ツナミが侵入したことで、三重県同様語形を交替させるかにもえたが、三陸地方を度重ねて襲った地震を伴う津波と遠隔地からの波動を受けての津波とで一部のひとびとの間に津波の分類意識が生じた。これによって地震を伴う津波をツナミで、体感地震を伴わない遠隔地からの津波をヨダとすることで意義の分化を行い、両語形を併存させようとした。ヨダを遠隔地からの津波とした背景には、ヨダがかつて太平洋沿岸に広がっていた「外洋からの大きなうねり」を原義（意義の核）として有していたことと関係しよう。

なお、三重県度会郡内および志摩郡内・鳥羽市の各自自治体史についても調査したが、津波をヨタとして記録しているものはなかった。三重県では昭和十九年（一九四四）の東南海地震津波の被害が大きく死者・行方不明者二五九名、住宅全壊流出四四四八戸に上った。昭和三十五年（一九六〇）のチリ地震津波では英虞湾で「海水をちょうど洗濯機でかき回すような、うずを巻く潮流」が観察されている。これ以降、幸いにして大きな津波被害はないが、ヨタが人々の間から消えゆくのと歩調を合わせるかのように津波の脅威が人々の記憶の中から薄れつつあるということを物語っている。

津波を表す方言「ヨタ・ヨダ」についての一考察（齋藤）

（注）

- （1） 度会郡教育会編『地方方言集』（大正三年三月、度会郡教育会）ここでは昭和五一年二月、三宅書店発行の復刻版による。標準語引きについては、拙稿（大島信生氏と共著）「標準語引き度会方言集」（皇學館論叢第二二卷第四号、昭和六三年八月）参照。
- （2） 徳川宗賢氏『日本方言大辞典』（平成元年一月、小学館）
- （3） 江畑哲夫氏『三重県方言民俗語集覧』（平成七年九月、江畑哲夫）
- （4） 小学館編『日本国語大辞典（第二版）』（平成一四年一月、小学館）
- （5）（財）民俗学研究所編『総合日本民俗語彙』（昭和三二年三月、平凡社）
- （6） 吉村昭氏『三陸海岸大津波』（中公文庫、昭和五九年八月、中央公論新社。原題『海の壁——三陸海岸大津波』（中公新書、昭和四七年七月、中央公論社）ここでは中公文庫版による。
- （7） 九里十太郎氏『明治二九年・昭和八年 田野畑の大津波 伝承と証言』（平成五年三月、九里十太郎）
- （8） 小島圭二氏編『日本の自然 地域編二 東北』（平成九年四月、岩波書店）
- （9） 宮古市高浜自治会編『津波記念誌 チリ地震津波より三十年あゝの惨状を振り返って』（平成三年二月、宮古市高浜自治会）
- （10） 平山輝男氏ほか編『現代日本語方言大辞典』（平成五年一月、明治書院）
- （11） 三重県編『三重県史 資料編 現代三 社会・文化』（平成一三年三月、三重県）